
ラッキーな少年の物語

カマボコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラッキーな少年の物語

【Zコード】

Z0687Y

【作者名】

カマボコ

【あらすじ】

運がいい少年は兎に角、気持ち悪く、近寄りがたい人間だった。
そんな彼はマイナスではなく、プラスだった。 箱庭学園の生徒達に迷惑を掛けていく少年。 だけど彼の気持ち悪さは性格、行動からではなかった。 そんな少年の物語。

【運が良くなりたい】

人間なら誰しもそんな事を考えるだろう。 なら、運がいい人間はどう考えるのだろうか？ 運が悪くなりたい？ 運が良くなりたい？ たぶん後者が正しいだろう。 運の価値なんて本人にはわからないのだから

×

「ふむ つまり、キミのバイクを切り刻んだ犯人を捜せばいいんだね。 僕が解決してあげようか？ 生徒会長には言いにくいんだろう？」

何處か不思議な雰囲気がする少年は胡散臭い笑みを浮かべ、少女に言った。

「…………本当に見つけてくれるの？」

普通な少女は不安気に少年に聞き返した。

「大丈夫だよ。 金があれば何でもできるんだ。 こんな問題、簡単に解決できるよ」

少年はニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべた。

×

少女と少年の出会いはつこさつきの事だった

「…………」

普通の少女は下を向き、とぼとぼと廊下を歩いている。手には一枚の封筒、背中には哀愁が漂っている。

少女の目的はスパイクを切り刻んだ犯人を捜す為、生徒会室に向かっているのだ。何故、生徒会室に向かっているのかというと、現生徒会長が行つた『田安箱』に投書しに行く途中なのだ。

生徒会長への信頼は確実なモノではないが、支持率98パーセントを叩き出した生徒会長のカリスマ性を頼つたのだ。二十四時間三百六十五日、依頼を受け付けると豪語した点で少女は生徒会長へ悩みを打ち明ける事を誓つたのだ。

「ここの角を曲がれば田安箱の場所……と思い、角を曲がると

「ああ　これが田安箱か……これを隠したら生徒会長はどのよつの反応をするのかな？　俺を更生させるのかな？　それはそれで面白そうだな」

はははと普通に笑つてゐる様に見えるのだが、何故か気味の悪い不思議な笑みを浮かべた。笑つていた人物は黒と茶色が混ざつた不自然な色をした、少し長い髪の少年だった。

少女はこんな変わった髪色の少年が学園にいたのか考えたが、もつと変わり種な髪の生徒が多かつた事を思い出した。寧ろ、少年は地味な方だったのだが、何故か目立つのだ。

生徒会長の様に完璧で完全が故に目立つではなく、何か、生

徒会長をも越える得体の知れない何かを隠しているように見えた。

「 ん？ 事件の匂いとスポーツドリンクの甘い香りがするぞ？」

どちらも少女から漂っているモノだった。

「ああ、キミの匂いか。 スポーツドリンクが飲みたくなるよ。 帰りに買おうかな？」 砂糖一袋と一緒に

少年はポケットから板チョコレートを取り出し、バリバリとかじり始めた。 急いで少女は風紀委員がいないか確認したいなかつた事に安心してホッとする。

「ん？ 風紀委員の事なら大丈夫だよ。 どうせ諦めるから」

少年はそう言つたが、どうせ嘘つぱちだらうと思つた少女は慌てて少年から板チョコレートを取り上げた。

「ぬおつ！ 何すんだ同級生！ 僕の楽しみを奪いやがつて！」

少年は玩具を取り上げられた子供のように怒つた。

「 同級生？」

少女の疑問が無意識的に口から出た。

「ん？ キミは一年生だろ？ だって、その首に掛けてるタオル。

それは一年生の陸上大会の参加者のみに与えられるモノだろ？ ほら、年月も合つてる」

少年が言つた通り、少女のタオルは一年生達しか持つていないモノだつた。 たが、このタオルを貰つたのは一昨日の事だ。

一般の生徒ならわかる訳ない。 一般なら。

「キミの悩みを解決してあげようか？ お代は金で買えるモノでいいよ」

少年のニヤニヤとした胡散臭い笑みが少女には希望に見えた。

×

「ふむ あの人ガ犯人か……」

少年は一人の陸上部員を見て呟いた。 陸上部員の名は諫早、三年生。 少年は彼女がスパイクを切り刻んだ犯人だと彼なりの手段で確信したのだ。

少年は彼女に近づき、声を掛ける。

「あのー、すみません。 このスパイクに見覚えありませんか？」

少年は手に持つていた切り刻まれたスパイクを見せ付けた。 少年の表情は人を不愉快にさせるような胡散臭い笑みだつた。

「 しつ……知らない！！」

諫早は少年のスパイクに驚き、一目散に走り去つていった。

「あつ、逃げられた…… 別に伺つただけで犯人だなんて言つてな

いのになあ。これじゃあ、自分から犯人ですって言つてるようじやないか。犯人失格だな。まあ、逃がさないけど

少年は自分が持つていたスパイクの片方を諫早目掛けて投げた。少年がのんびりとしてる間に諫早との距離はグラウンドの端から端ぐらい。普通は届くはず無い。普通なら。

少年の投げたスパイクは諫早の方向を大きくズレ、陸上のラインへと落ちた。

そのスパイクは陸上部の足に当たり、蹴り上げられた。スパイクは宙を舞い、ゆっくりと落ちていく。そしてスパイクはサッカーボールと重なった。サッカーボールごと蹴られたスパイクは勢いよく飛んでいき、

諫早の足に当たった。諫早は衝撃でバランスを崩し、

「ぐにゃー？」

前に倒れこんだ。

×

「諫早先輩、どうして逃げ出したんですか？俺はこのスパイクに見覚えがあるか伺つただけですよ？自分の履いているスパイクと同じやつだ、とかでもいいんですけど」

少年はいつものように気分を害すような人を不安定にさせる笑みで諫早を追い詰める。

「どう……どうして私が犯人だつてわかつたの？」

諫早が不思議そうに訊ねる。

「簡単ですよ。 お金を使いました」

「おっ……お金?」

「そうです。 お金です。 あなたの証拠の全てをお金で買い取りました。 陸上部で怪しい行動を取つていた三年生、それもレギュラーから外された人。 普通はこれだけでは解決出来ません。 まあ、生徒会長のような超人なら出来るんでしょうけど……まあ、凡人の俺では不可能な犯人探しです。 なので、箱庭学園について一番知っているであろう人物に聞いてみると、なんと、目撃したそうです。

証拠の写真も貰いました。 これです」

少年は右ポケットから二十枚程の写真を見せた。

「『彼女』^{いわく}、三百枚程度違う角度から取つた写真があるそういうので二十枚程度買いました。 それでこの写真に写っているのは誰何でしょうね?」

少年は持つていた写真をばらまいた。 その写真には依頼主の少女のロッカーを開ける諫早やスパイクをハサミで切り刻む諫早が写つっていた。

「…………」

諫早は唖然とした。

証拠が有りすぎて反論も何も出来ない彼

女は脳から何か口に出来る言葉を探しているのだ。
ツク状態だ。

「あなたも運が悪いですね。もし、依頼主が俺に出会わなければここまで問い合わせられる事もなかつたでしょ。生徒会長が面白くもない解決策を生み出して、台本通りに終わつてたのでしようけど、俺は徹底的に異常事態ですから、何仕出かすかわからぬモノでしてね」

少年はいつもとは違い、純粹な笑顔で諫早を見る。少年の笑顔は純粹な筈なのにいつもより薄気味悪く感じた。

「うわっ……」

諫早はあまりの不自然かつ奇妙な笑顔に、つい、口から声が漏れてしまつた。

「うーむ、やはり不自然な笑顔になつてしまつな……まあ、いいか。では先輩、俺はこの辺で」

少年は固まつたままの諫早を置いて立ち去つとした。

「 待つて!」

やつと脳が追い付いてきた諫早は少年を呼び止めた。

「何ですか?」

少年は振り返らずに訊ねる。

「わつ……私はどうす」 「簡単です。 被害者に直接、心を込めて謝ればいいんです」

少年は諫早の言葉を遮る。

「六時に一年十三組に来てください」

少年は後姿からでもわかる程、笑っていた。

×

ガラツと教室のドアが開いた。

「失礼しまーす……」

諫早だ。 謫早は一年十三組の教室のドアを開け、電気も点いていない真っ暗な教室に入った。

「 六時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーですよ先輩」

教卓に座っていた人物が諫早に話しかけた。 例の少年だ。 少年はニヤニヤと諫早を嘲笑うかのような笑みを見せる。 外は曇っている為暗く、教室の電気も点いていないのに少年は何故か目立つたいた。

「えーと……」「ああ、俺の名前は『財宝』ですよ先輩」「どうして私の言いたい事がわかるのかな……」「先輩程顔に出る人間はないでしょうね」「むう……」

相変わらずニヤニヤと人を馬鹿にした様な笑みで諫早をからかう
財宝。諫早は財宝を無視して被害者の少女を目で探す。

「ああ、先輩。あの子はいませんよ。この事を知りませんから」

少年は諫早の焦点を自分だけに集めた。

「えつ？……来ないの！？」

「はい、先輩が犯人だという事も聞いてませんよ」

「じゃあ……何の為に……」

「先輩に被害者がどのように苦しみ、どのような状態にまで陥ったか、たっぷり話しましょう。時間はまだまだありますから」

財宝は楽しそうに笑った。

一時間程度、財宝は少女の話をした。

財宝は大袈裟に曖昧に、そして苦しそうに少女の話をした。

財宝は終始笑顔だった。

×

「.....」

諫早は黙つてしまつた。主な原因は少女への謝罪を考えて下さい、と極悪人の笑みではなく、普通の有り触れた笑顔で言われたからだ。財宝の普通の笑顔は何か気持ち悪く、胸を突き刺すかのような感覚に陥つてしまつ氣色悪い笑顔だつた。まるで悪人が善人のふりをしているかのような不自然さが自分の精神を痛めつけるのだ。

財宝の言葉が重くなり、一つ一つ積み重なつていく。たつた一度の行為で心が折れそうになる。財宝の言葉に従わないと痛みが増すようになる。なので、今の諫早は少女への罪悪感しか溜まらない。

そんな諫早を見て、財宝は……楽しみを得た子供のようにニヤニヤと笑つていた。全て財宝の計画通りで思惑通りなのだ。時計を二三度確認する。そろそろだ、と財宝は嬉しそうに呟いた。

時計の針は七時を指す。同時に教室のドアが開いた。

被害者である少女が教室に入ってきた。財宝は諫早の肩を叩き、
囁く。

「来ましたよ」財宝がそう囁くと諫早は田にも止まらぬ速さで少女の目の前に立つ。

「…………ごめんなさいっ……」

諫早が謝ると同時に膝が地面に付く、罪悪感から開放されて緊張が解けたからだろう。諫早は一言言つと何も言わずに立ち上がり、走り去つていった。

「 七時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーだよ。『有明ちゃん』」

財宝は声を張り上げて言った。

×

「つまり、『諫早先輩が犯人だった』ってこと?『財宝くん』」

「まあ、そういう事だね。『悪意百パーセントでやつたんだとそれでどうするんだ?『許すのか?』」

財宝は無表情で有明に訊ねる。

「『許す』それが私の出した答えだよ。今までの我なら絶対に許さなかつたと思う。だけどキミを見たらそんな事で怒つてた私がちつぽけに見えちゃつて……嘘を混ぜたり、大袈裟に言つたり、全部私の反応を見たかつただよね? プラスに転ぶかマイナスに転ぶかを。それに財宝くん、キミのその人間が最も嫌う非道で卑怯な性格。いや、人格。まるで『お宝を人から遠ざけているような』」「はつ……」「えつ?」

「あははははっ!! いやいや、こんなにも俺を推測した人間は始めてだよ有明ちゃん。一日も経たずに俺の半分以上を解き明かされたね。あの『生徒会長』よりも凄いんじゃないかな? 深いに決まってるよ! キミは才能の塊のような人間だね! ああ、生徒会長には持てない才能だよ。普通の才能。生徒会長のように決まった勝利じゃない。台本はない異常な行動が出来る才能だ!まさかこんな人物がいるなんて……流石、箱庭学園と言つたところかな? 僕もラッキーだなあ」

財宝は楽しそうに、高らかに笑うのだった。

×

「……不知火、今日は一段と食つてないか？」

「ああ、今日はいいんだよ『ラッキーだつたし』」

「はあ？」

少年は首を傾げた。

ヒトガタが言葉を発する。

「××××！ ×××力ネ××！」

『力ネ』とだけハツキリと聞こえた。ヒトガタは俺に触れようとする。だが、俺には触れられなかつた。

【害を成すモノだつたからだ】

×

音楽室に一人の生徒がいた。一人は異質で不気味な雰囲気がする近寄りがたい少年、もう一人は何処にでもいそうな一般的な少女。少年、財宝はニヤニヤと人が嫌いそうな笑みを見せると、ピアノの前に行き、座つた。

「うん 折角だし一曲弾こうかな？」

少しワクワクしながらそう言った。

「えっ？ 財宝くんってピアノ弾けるの？」

「一応な。唯、不愉快な音階が耳障りだと言われたけどね。だから聴かない方がいいよ有明ちゃん」

財宝は耳を塞ぐそぶりを見せる。

「いや、聴いてみたいな」

少女、有明は財宝に近付き、ピアノを眺めた。

「……まあ、好き勝手に弾こつか」

財宝は何故か少し躊躇ためらいながらも鍵盤に手をやる。指が鍵盤に触れた。

「うわああーー?」

有明は耳を塞いだ。えげつない程酷く適当な音ではなく、耳障りに近い不協和音のような気が狂いそうな音だつた。発泡スチロールを擦つたような、耳元に蚊が近づいたような、不快の極みのような、人間の気分を害する為に作られた音だつた。よくこんな世纪末みたいな音を作れるなと思いながら必死に耳を塞ぐ。汚くはないのだが精神を引き剥がされるように痛々しい音が脳を狂わせるのだ。

そりに、音楽室の壁が風化していた為、音が廊下に響いていた。

昼休みである今、音楽室前の廊下を渡る生徒も少なからずいる。幸いこの棟を使う者が少なかつたのだが…… 音楽室付近にいた生徒達が頭を抱え、苦しんでいた。別に肉体的ダメージというものはないが、今までに体験した不幸な記憶などが頭によぎり、気持ち悪くなる。さらに音が不快かつ奇妙な音階で音が続いている事自体不思議な音が鼓膜を刺激し、不安定なもやもやとした気持ちになるのだ。中には苦しさの余りに嘔吐する者もいた。

だが、財宝はそんな事はお構いなしにピアノを引き続ける。

「ストップオオオウヅツ！！ やめて！ 止めて！ ストップ財宝ク
ン！！」「

有明がピアノに熱中している財宝の耳元に近づき、精一杯叫んだ。

「…………ん？ ああ、有明ちゃん。 ビリしてそんなに取り乱し
てるんだ？」

財宝は頭にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げる。 有明は
怒りマークを浮かべて財宝を睨んだ。

×

「俺は子供の頃から放送部に入るのが夢だったんだよ」

財宝はニヤニヤと笑いながら放送室の鍵を開ける。

「…………ビリで手に入れたのそんなもの」

財宝の手にはマスターキーが握つてあつた。

「金で買えないものは無いんだよ有明ちゃん」

ニヤニヤとつもの様に笑いながら放送室のドアを開けた。

×

「おおっ、これで放送が出来るのか

財宝は放送用のマイクを見て言った。田はキラキラと子供のよう輝いている。

「財宝クン、やめといた方が」 「『あー、あー、マイクのテスト中』
「遅かったか……」

有明が財宝を止めようとしたのだが、財宝はすでにマイクのスイッチをオンにしていた。

「『あー、全校生徒の皆様、こんにちは。俺は一年十三組の財宝と言つモノです。どうして一般の生徒である俺が放送しているのかといふと、皆さんの方になりたいからです。力になるとはそのままの意味なのですが、天邪鬼あまのじやくなヒトもいるでしょうし、詳しく説明しましょう。何か悩み事があつたら生徒会長ではなく、俺に相談してください。そうすれば確実に解決できます。ここまで生徒会長と同じでしよう。でも、ここからは違います。何でも相談可能です。例えば……Aさんがムカつくから変死させてほしいとかテストを満点にしてほしいなどなど、子供なら誰もが考えそうな狂気染みた相談まで受け付けます。しかも報酬は入りません。俺はヒトの喜ぶ顔が好きだけの一般人ですから。そんな夢や希望のある生徒は二年十三組まで。以上』」

財宝は楽しそうにマイクのスイッチを切った。

「…………うわあ

有明は驚きと不安な気持ちでいっぱいになつた。唯、今の財宝を見て、少しの発見があつた。この人は子供の残酷さが残つたまま成長した人だと。

×

「ううん、誰も来ない……」

財宝は一年十三組で待機していたのだが、財宝を頼りに相談する人物は一人もいなかつた。

「全部、めだかちゃん生徒会長の影響か……面白くないな」

はあ……とため息を吐いた。ちなみに有明は部活に行き、現在、一人ポツンと教室で待つているのだ。

誰も来ないなと思ったその時、教室のドアが開いた。財宝は相談者では無いことを知っていた為、気だるそうにため息を吐くのだった。

「『財宝』と聞いてもしやと思ったら……やはり貴様だったのか財宝……」

生徒会長のめだか率いる生徒会の全員が教室に入ってきた。

「久しぶりだけど……相変わらずキミは面白くないね。無機物のロボットのようだ。行動パターンも何もかもが台本どおりで、決められた人生を歩んでヒトを愛して死ぬんだろうな」

財宝はニヤニヤと笑わずにぶつきら棒に言葉を吐いた。

「めだかちゃん……コイツは……」

生徒会の庶務の人吉善吉がめだかに君の悪い少年について訊ねた。

「『財宝』 苗字は名乗らないから聞いたことがないのだが名前だけは知ってるぞ。何処か『球磨川』に似た気持ち悪さがあるから異常だとは思っていたが……まさか十三組にいるとはな。流石に気がつかなかつたぞ。『財宝』一年生、貴様がかつて心優しい少年だつたことは知つてゐる。何か不幸があつて性格が捻じ曲がつてしまつたのだろう……だから私が更生させてやろう! 完全にな!」

めだかが上から目線で財宝に言った。

「どーでもいー、まあ、一つ言えることは『俺が不幸になるわけないじゃないか』」

財宝はいつものニヤニヤ顔に戻り、恋を叩き割つた。

「……つ! ? 逃がさんぞ! 」

めだかは財宝の行動を判断して、財宝を捕まえようと前進したのだが、

奇跡的に足元にレンガがあり、偶然、それに躊躇、

「うおつ! !

完璧超人である生徒会長がこけた。しかも落_下点には横たわった机、その机がめだかに当たる田と鼻の先で、

「つりあああ! !

善吉がめだかを支えた。まさに間一髪の所だった。

「……ははは！ 善吉の方[#]が面白そうだ！ その主人公より面白いよ。 これだけでも今日の成果は有つたかな？ ラッキーだね」

そう笑うと財宝は一階から飛び降りた。

めだか達は慌てて外を見る。

財宝が飛び降りた先には陸上部のマットがあり、そのマットに飛び込んだ。無傷では済まない筈なのに何事もなかったかのように立ち上がり、そのまま走つて逃げてしまった。

「何者だよあいつ……」

善吉は逃げていく財宝を見つめながら呟いた。

2（後書き）

感想、誤字などがありましたら感想に書いていただくと嬉しいです。

3（前書き）

最初だけ一人称

「つまり、財宝クンにはフラスコ計画の十四番田をしてもらいたいのです」

理事長が 89032793.J. ノふえ うえ。

「十四番田ですか……十三人を確認しましたが十分じゃないですか？ 核爆弾でも落とされない限り……」

俺がさひふえ もれ も もれ も もれ も もれ も もれ も もれ
f w q f q f a u s f。

「生徒会長が敵なんですよ」

「降参した方がいいんじゃないですか？」

俺は『 df hう v f pd ふあん s v b v n d f じゅ ひだり』と
思った。

×

「いやいや、それだけの理由で……」「十分な理由です。核爆弾よりも恐ろしいじゃないですか？」

財宝はいつものように一いやーと笑わずに真剣な顔だった。理事長はそれに気づき、問う。

「どうしてあなた程の人間が彼女を恐れるのですか？ あなたのそ

の『福作用』なら絶対に攻撃されないのに……」「

「俺の異常は戦う為にあるんじゃないんです。ご褒美のようなモノですかね？ 宝探しの宝のような役割です。不公平さと例外を身に着けたものにしか手に入らない……ね」

財宝はいつもよりニヤニヤと人を見下すかのような笑みを浮かべた。

「それに、俺は彼女が怖いんです。その異常さが怖くて恐ろしいんです。決められた人生を歩むのを楽しんでいる。それが怖い。それに他人の人生までも左右させてしまう所ですかね。人吉善吉クンが一番の被害を受けているでしょう。予言しましょう、彼はいつか生徒会長に捨てられます。決められて、なお、人生を棒に振る破目になるでしょう。まあ、いつか解決させるでしょうけど」

財宝は無表情で語った。興味が無さそう。

「……では、あなたは関わらな」「「いえ、妨害させていただきます」「えつ！？」

財宝はニヤニヤといつもより歪んだ笑みを見せた。凄く嬉しそうに、笑うのだった。

「たとえ、俺が嫌いな人物でも危険人物でも最悪な人物でも、俺は妨害します。それが負け戦でも価値が確定していても俺は妨害するでしょう。俺は他人に迷惑を掛けるのが好きなだけですから」

理事長は財宝の気持ち悪さを改めて思い知る。人間の憎悪と邪

悪さを一緒にした、正に、悪人だと自分が味方でよかつたなどという気持ちもない。 いつ裏切るかさえわからない、汚れすぎて寧ろ、眩しそう。 兎に角、理事長は仲間に出来た喜び以上に、後悔があった。

「一応、言つておきますけどあなたは黒神めだかを倒すのではなく、フラスコ計画を完成させるのを手助けする十四番目ウラカタサードイーン・ペーティー」にして、十三組の十三人の邪魔にならないよう！」

「わかりませんよ？ 自分の行動すら読めませんし」

あはは、と笑う財宝を尻田に、理事長の財宝への恐怖は積もるばかりだった。

×

「うわあ～～ひつまだあ～～」

「と言いつつ何普通に生徒会室へつてるんだよお前！」

現在、財宝は何故か生徒会室にいる。 どうして？ と聞けば、適當 と答えるだろう。 本当に理由も無く自然に入つたのだ。

「……めだかさんがいなー今生徒会を潰しにきたのか？」

金髪の長い髪の男、阿久根高貴が構えながら財宝に恐る恐る訊いた。

「んんん？ ベツツニ～、そんな面倒な理由もないよ。 暇つぶしだよ暇つぶしへ、友達がいなーほっちな俺をかまつてやつてくれ

よ。俺だつて生徒会長の敵なんてポジションなんてやだよ。皆友達だよ、友達。だから仲良くしようぜお三方?」

財宝はいつものように「ヤーヤ」と笑うのだが、気持ち悪さは無かつた。そして彼が凄く眩しく思えた。

「いやいやいや! きやら崩壊つてレベルじやないよね! もう別人の域だよね! ? 作戦? 油断させておいて隙を見せたら討つ! とか」

生徒会会計の喜界島もがなは財宝ののほほんとした姿を見て、取り乱した。

現在、生徒会長の黒神めだかは仕事の為いない。めだかを嫌がっていた財宝を見ていた生徒会メンバーはめだかのいない生徒会を狙つて此処に来たのかと疑つているのだ。

勿論、財宝にそんな気は全くない。喋り相手欲しさなのだ。

「討つ! つて言われてもね。俺は別にさいきょつてわけでもないし、てんさいつてわけでもないからね。唯、ちょっと運がいいだけだし、倒すのなら倒せばいいじゃないか。俺は抵抗しないよ」

「……まあ、ここのはお前を信じよう」

「「人吉クン!」」

人吉の判断に驚く一人、それを見た財宝は「ヤーヤ」と笑った。

「マイツからは戦う気力が感じられない。もう元からないみたい
だし、今日ぐらいいいんじゃ」 「甘い物食べたい」「えつ
？」

「甘い物が食べたい。でも今は持っていない。なら買いに行か
なくちやならない。なら此処から出て行かなきゃならない。わ
あー、急がないと！」

財宝は猛ダッシュで生徒会室を飛び出し、走り去っていった。

「……何で来たんだよ……。」「

生徒会一同が一つになつた瞬間だった。

「ふもふも つまり、生徒会と戯たわむれる間は何もするなという事かい？ ふもふも。 でもでも、俺もそんな真剣勝負を邪魔したくなっちゃう性質たちなんだよね。 ふもふも。 人間の汚点を集結させたら俺になるらしいぜ？ ふもふも」

財宝はお菓子をふもふもと食べながら聞き返した。

「黙つてここに閉じこもつてお菓子でも食つとけ！ はあ……どうして俺が不要物を用意するんだよ……」

明らかに高校生には見えない背丈の少年はため息を吐き、自分より背丈の高い平均的な生徒達を使い、両手が塞がる程いっぱいのお菓子を運んでくる。それを繰り返し、一年十二組の教室はお菓子で埋め尽くされてしまった。

「わーい、天国みたいだね。 はっぴーはっぴー」

あははーと幸せそうな顔で財宝が言った。

「ぶん殴りてえ……」

少年、雲仙冥利は改めて財宝が嫌な人間だと思い知らされた。経済的な意味で。

×

放課後、現在、学年一嫌われているであろう人物が居座っている

一年十二組のドアが開いた。

「！」とこわばせー

有明だ。今日は陸上部が休みな為、友人の財宝の所へ遊びにきたのだ。

「 つてなんじや こつや あああー！？」

有明の声は静かな廊下に良く響いた。

×

「何なの！」お菓子の山はー！」

有明はお菓子の山のてっぺんに寝転がっている人物に向けて叫んだ。

「ん？ ああ、久しぶりだね有明ちゃん。 僕は今仕方なく大人しくしているんだ」

「教室をお菓子で埋め尽くす事を大人しくとは言わなーよー！」

「まあ、俺にも色々あるのね。 これが仕事つてやつ？ いや、寧ろライオンの餌付けに近いね。 迷惑掛けないよつて餌に『氣をとらせておく的な？』

財宝はいつものように酷く憎悪が乱れた笑みを見せる。 相変わらぬのよつだ。

「いやいやいやー 全然わかんないよ全然！」

「俺みたいになればわかるぜ？」

お菓子を貪りながら厭らしい笑みを見せる財宝。この喋つてい
る間にもお菓子を食べ続けており、山のようくに積みあがっていたお
菓子が丘のよう平らになつていつた。

「その貧弱そうな体の何処に入るの……」

「甘い物は別腹と言ひじゃないか

「そんな意味じゃないよー」

財宝は相変わらずのよつだつた。

×

「 腹八分目つてやつだね」

財宝は一時間ちょっとと山のように積みあがつていたお菓子を食
べ尽くしてしまった。僅か一時間ちょっとでだ。化け物のよう
だ。それでいてまだ腹八分目と抜かすのだ。恐ろしい人物だ。

「これを人間の神秘つて言うのかな？ …… 財宝クンなら普通だと
思つてしまふ私が怖い……」

慣れつて怖い……と思つてゐる有明だつた。その間に財宝が教
室を出て行く事に気づかない程凹んでいたのだろう。

×

「さくさく　　お腹も満たされたから遊びに着たんだけど……
もう終わりそうだね。　冥利君にはもつと粘つて欲しかったなー。
こいつ、めだかちゃんがちょっと苦戦してるぐらいにね。　そこで
俺が登場して台無しにするのさ。　バトルなんて無かつたって感じ
に」

「……結論だけ聞こうか」

「邪魔したいです」

「聞いた私が馬鹿だつたよ……」

はあ、とため息を吐く生徒会長こと黒神めだか。　現在、風紀委員長である雲仙冥利と戦い、勝つたものの自らを守らない戦い方をした為、傷だらけで動けないほどだ。　今は善吉におぶつてもらっている。

「完璧超人のめだかちゃんが馬鹿だつたら俺なんかプランクトン以下だよ。　それよりそれより、キミが冥利君を倒したせいで面倒なことになるよ？　暫くすると異常者達が学校で大暴れ！　とか展開？　まあ、俺には関係ないけどね。　ああ、言いつもりなんてプランクトン並みに無かつたのについ口が滑っちゃったよ」

わははと無理に作った笑顔で笑う財宝。　生徒会一同は財宝の発言に驚いた。

「異常者……まさか！　十三組が！？」

「たぶんそうなると思うね。曖昧で『ごめんね』。俺の憶測だし、口止めされてるしね」

財宝は指でバツマークを作り、口にあてた。その腑抜けた行動が人をいらつかせるには最適だった。

「落ち着け私落ち着け私落ち着け私……」いつにムカついている暇なんて無いんだ……ふう、まままあ、貴様がそ、そう言つならし、仕方ないな！」

「ん？ どうしてそんな顔するんだい？ 僕は情報提供してあげたいい人なのになー。そんな顔すると僕が悪いみたいじゃないか。全く、人の気持ちつてもんを考えてくれよな」

「善吉……一発ぐらいならぶん殴つても」「駄目！」

財宝は相変わらずだった。

×

あれから何週間が過ぎ、財宝はどうと

「ん？ 何だか俺と似たような奴が……いや、違うか間逆って感じ？ 僕が正義ならキミが悪かな？ いやいやいや、僕が正義なわけないね。寧ろ、悪の根源つてやつかな？ じゃあ、キミは何なのかな？」

「『キミが悪?』『あはは』『ないないありえないね』『悪でも正義でもないじゃないか』『そして悪の敵であり、正義の敵でもあるのを』『全ての敵つてやつ』『だからキミは正義にもなれない』

いし悪にもなれない』『傍観者さ』

何処か気持ち悪い雰囲気がする学ランの少年とニヤニヤと悪の親玉のような笑みを見せる少年はお互いについて語っていた。

「へー、どうでもいいけど一つ言いたいことがあるんだ」

「『ふーん』『どうでもいいけど』『一つ言いたいことがあるんだ』

「

一人は声を揃えて言つ。

「俺は」「僕は」

「キミが大嫌いだ」「キミが大嫌いだ」

そう言つと一人の少年は気味悪く笑い、別方向に歩いていくのだった。

5（前書き）

能力説明回

「では、あなたには古賀さん達と一緒に戦つてもうらこまじょつか」

「俺が戦う？ あはは、「冗談は性格だけにしてくださいよ。俺はそんなバトル漫画向けのキャラじゃないですし、どちらかといえば打ち切りバトル漫画の脇役つてここですかね？」つまり、バトル漫画の底辺の底辺つてところです」

「ですが……」「でも、俺は妨害する」ことが出来ます。しかも相手に攻撃されません。打ち切つてますから」「それは好都合ですね」

理事長は財宝のよう元連役らしく、笑うのだった。

×

「どうして俺がこんなことしなければならないんだー。今からマヤ文明の予言が当たるよりも大変な事があるところのーー」

「どうせお菓子買うとかそんなのだろ？」

「うそ、糖分補給」

財宝はのほほんと答えた。その反応を見て、包帯で顔を隠している少女はやれやれと面倒くさいなと思うのだった。

×

「あー、どうして俺がこんな面倒事を頼まれて申し受けたんだろう？」

財宝は自問自答する。人の嫌がることをする為なら何でもする人間である財宝は面倒なことでさえ維持でもやる。財宝は靈長類で最も嫌われそうな性格だった。

「(ねーねー、名瀬ちゃん……どうしてコトージがいるの?)」

包帯で顔を隠している少女、名瀬妖歌に明らかに私服な少女、古賀いたみが小声で訊いた。

「（）」ちが訊きてえよ…… 理事長は何を考へてるんだ？ ツと仲良くする方がフラスコ計画より難しいだろ……」

古賀と名瀬は一緒にため息を吐いた。 そう、財宝と関わると気分が極限にまで下がつてしまい、人間、地球上の生物の九割は生理的に受け付けないのだ。 つまり、現在財宝と仲が良い人物は地球上の一割の例外なのだ。 それは財宝の異常である能力のせいなのだが…… その話はいつかするだろう。

「あー、もう、どうしてこうなったんだよ。キミ達も嫌だろ？
こんな気持ち悪い人間が傍にいてさ。俺もこんな面倒なこと辞
めたいんだしさー。これは……いつその事めだからちゃんと敵対し
て……駄目だ駄目だ！ あんなバトル漫画にしかいなさそうな人
間に勝てる訳ないし、ありえないありえない。
一したらいいと思う？」名瀬ちゃん

「俺に振るなよ」

「じゃあ、古賀ちゃん

「私に振りなこでよ

「…………」

財宝に仲間なんていなかつた。

×

「じゃあ、俺は何をすればいいんだ?」

俺は〇〇だαsbfだsαながりdαfだgαsβm、、、。ヒ言
つた。

「とつあえず、生徒会一同と仲良くなじあげたらここんじゃねえか
? もひるの邊にいるだらう?」

名瀬ちひろは98332.JPaf.。な顔で……、三@マニ:

「言つた。

「うーん……まあ、そういうのかな? じゃあ、理事長を裏切らう
そつしょつ。てか、俺はビッちて守るんだらう。あの学ラン少
年も傍観者だと何とか言われたしなー」

俺は9054 ·@@· ·「 ······と思こながり···。 @@ 「
「 ¥¥¥つた。

×

「……どうして此処ちかにいるんだ財宝」

「えええ？ 僕が何処にいたっていいだらう？ まさか僕がめだかちゃん達を倒す為に来たとか思つてる？ 嫌だなー、キミ達は自分の事を物語の重要人物だとか思つてるのかい？ いいなー、その自己意識過剰でお気楽な考え方、僕には真似できないよー。 尊敬するよ崇高するよ信仰するよ。 あはは、いい性格してるよ。だからキミは主人公めだかちゃんなんだ。 キミが幸せなら僕は何も言わないけどね。スライムAはキミに倒されるのさ」

「……何が言いたいんだ？」

「スライムAは仲間になりたそつちでそつちを見ている」

「「「「はあ！？」」「」」

財宝が仲間になつた。 パーティの運が上がつた。 高感度は限界まで下がつた。

財宝は孤立してゐる理由は一つだ。 仲間になつた方が偏つてしまつからだ。 つまり、財宝が仲間につけば、

負けるからだ。

財宝の能力、『福作用』^{ブラック}は異常な幸運とは少し違う。 幸運の価値なんて人間によつて変わつてしまつ。 つまり、財宝の幸運と理想するもの。

財宝の幸運は自分で決めた運、好きな時に好きなタイミングで好

きな幸運を操れる能力なのだ。使い方によつてはめだかさえも超えてしまう危険なモノなのだ。

だが、財宝はその幸運を欲深く使つたことはない。生活費（主にお菓子代）ぐらいだ。後は自分の悪ふざけ（子供の悪戯に近いもの）ぐらいだろう。決して、悪の親玉の考えは……無いともいえなくなくなくなくもない。言い切れない辺り財宝らしい。この能力のせいで財宝の人格が作られたのだが、それはまた後の話で。

「一つ、言つておくと財宝は過負荷ではない。^{マイナス}異常だ。^{プラス}

×

「頑張れーがんばれーガンバレー……面倒くさい」

「冗談で言つたんだけどなー……」

あーあ、と脅威の棒読みで名瀬が言つ。何だコイツと言わんばかりに摩訶不思議の生物を見るかのよつた目で見る古賀。

「やつぱりどちらかに付くつて面倒だね。仲間も全部何もかも敵にしか見えないや。全く、友達いない人に仲間なんて空想にしかいないんだよねー。空想なら傷つかずに頷くだけだし、楽なもんだよ。まー、何が言いたいかつて言つと……もっと面白く飽きないような感じで戦つてよ。そうじやないと俺が台無しにするよ？」
全部ね」

財宝は子供が見たらひきつけをおこしそうな酷く歪んだ笑みを浮かべた。だが、皆は驚かずにはまかとため息を吐いた。馴れと

は恐ろしいものである。

現在、阿久根と古賀が戦っていた所、めだかが現れ、古賀に圧倒的な力の差を見せ付けた所で財宝が現れたのだ。相変わらずの妨害好きだった。

「……財宝、貴様は何がしたいんだ？」

「邪魔」

「いや、そうじゃなくて……何が目的なんだ？」

「嫌がらせ」

「うぬつ……」

めだかは心底悔しそうな顔をする。財宝の相手をすると最初はイラつくだけなのだが、後々、疲れと虚しさが限界値に達する。軽く言うとイラつくし疲れるし虚しくなる負の三大要素てんこ盛りだ。生物には必要ない人間といえる。

「おい自称妹、こいつは別に目的なんてそのまんまだと思ひせ?」

名瀬 いや、黒神くじらが財宝を指差しながらそう言った。

「そのまま?」

めだかは聞き返す。

「そうだよ。ここつの目的は妨害、邪魔、嫌がらせ、どつかのガ

キ大将みたいなもんだ。 唯のかまつてちゃんだよ。 胸糞悪い糞
ガキ」

くじらの放つた言葉が財宝に突き刺さ

「そうだね。俺はかまつてちゃんのようだ。寂しがり屋のうざい脇役ってところかな？ ああ、気持ち悪い。悪いけど言葉で動搖するようなできた人間じゃないんだ俺は」

らなかつた。財宝に精神攻撃は通用しないようだ。

「でもでもなー、一人間としてそんなどつか行けみたいな目が心に来るんだよなー。仕方ない。隠しボスにでもちょっとかい掛けに行こうかな。覚えてろよー、ははっ」

財宝は誰でもわかるような作り笑いで笑いながら何処かに行くのだった。

財宝がいなくなつた空間が静かになつたのは言いつまでもない。

六人の生徒が仲良くしてねと言つた。その時、【壁がボロボロと崩れ始めた】

壁はゆっくりと崩壊していく、人一人が通れそうな穴が空いた。嫌な雰囲気のする六人も、チーム負け犬と言う六人も、生徒会長のいない生徒会のメンバーも、そのぼつかりと空いた穴を見た。すると崩壊した壁から何やら人間の声が聞こえてくる。人間の声なのだが、超音波に近い不快感のある、音の暴力のような特徴的な声だった。

「【仲良くしてね】か……俺には無縁な言葉だね。こっちが仲良くしようとしても、相手は拒絶してくるんだよ。酷いもんだ。差別だ差別。人間怖いよ。めだかちゃんは大好きな人間は俺を嫌うんだ。あーなんて酷いんだー。だからキミ達も怖い。怖いから仲良く相打ちしてくれない？俺が邪魔するからさ」

財宝はニヤニヤ笑いながらそう言つた。財宝は敵でもなければ味方でもない。学ランを着た少年の言つた通りだった。

×

「ねえ、どうして皆頑張ってる中、キミ達四人は動かないんだ？あれかい？あの動いた方が何とやらつてやつか？そんな漫[画]チックな話があるわけないだろう馬鹿らしい。寧ろ、動かないでどうするんだよ。人間なら前に進めってもんだよ四人さんよー。

ほら、俺だって動き回つてゐるのに無傷だぜ無傷。 ノーダメージつてやつだよ。 動かすに得することなんて存在しないんだよ。 我慢なんて無視しちゃいないよ。 体に毒だぜ？ ヒットポイントが削られるんだぜ？ ポケモンセンター行きだぜ？ それなら当たつて砕けるの精神で何事にも体当たりした方がいいだろ？ ほら、俺みたいにさ

「……お前が言つても説得力ねえんだよ」

財宝が言つた通りウロウロと歩いてゐるのだが、^{プラスシックス}裏の六人の攻撃も負け犬軍団の攻撃も全て当たらないのだ。 それは財宝が避けているのではなく、モノが自ら避けているように見えた。 財宝には当たらないように設定されているようで気持ち悪いものだった。

「^{プラスシックス}裏の六人の奇想天外で個性的な能力が薄れて見えんねんけど……このラッキー君、よく目立つとるな～」

財宝の外見は、髪が茶色と黒の混ざつたような普通なら目立つような色で、服装も少し乱れており、目に付くだろう。 だが、^{プラス}裏の六人も負け犬軍団も一般では有り得ないようなファイクションみたいな風貌をしている人達だ。 なのに一番地味である財宝が目立つことが奇妙だった。

「嫌われ者ほどよく目立つんだよ。 皆は上手く演奏できるのに一人だけ大きく音程外れてるみたいな嫌な目立ち方だけだね。 悪目立ちつてやつ？ まあ、ある人いわく悪に成りきれていないらしいけどね。 でも善人でもないらしいんだ。 ジゃあ、俺は何なんだ？ と思うだろ？ その人は俺を傍観者と言つたんだ。 ステージに乗り込んでくる観客が一番キミらしいって言われたよ。 ようするにかまつてちゃんの迷惑人間だそうだ。 俺らしいや

あははと笑う財宝。だが、目は笑つていなかつた。その目はその人物を怨むような憎悪が混じつた危険な者の目だつた。

「それでさ、そのある人がね。此処に来るらしいんだ。^{いつ}何時かも何處にかもわからないけど兎に角ね。その人はこの学園を滅茶苦茶で原型留めないぐらにぐちゃぐちゃにするだろうな。憶測だけどね。まあ、めだかちゃんが何とかするだろうけどそれをお妨害しないとね。両者とも」

財宝は楽しそうに笑う。玩具を見つけた子供のよつ。

「『ねえねえ』、『どうしてキミがこんな所にいるのかな?』『気持ち悪い運命つてやつ?』『僕は悪い事もしていないのに酷いもんだよ』」

奥の方から寒気のするような声が聞こえてきた。財宝以外、奥を見る。そこには学ランを着た少年がヘラヘラと笑いながらゆつくりといっしょに近づいていた。デジャブのように思えた。

×

「あれ? 軽く冗談半分で言つたんだけど、これフラグだった? 勇者の初めての戦闘が魔王みたいなもんだよ? もつと遅く現れなよ悪役。ラスボスは最後に現れるもんだ。こんな中ボス戦で現れたら弱つちく見えるぜ? 学ラン先輩」

「『あれ?』『知らなかつた?』『僕は靈長類で一番弱いんだぜ?』『ラッキーくん』」

一人の少年はニヤニヤと気持ち悪く笑う。 頬は笑っているのだが、何処か怒りが混じったような笑顔だった。

一人がわざとらしく笑っていたその時、一人の背後から黒い何かが飛び出してきた。

黒い何かは髪の毛だった。 筑前優鳥（曖昧）の能力、『髪々の黄昏』^{リートメント}によつて伸ばした髪による攻撃だった。

髪は財宝に届きそうなどころで不自然に曲がり、天井にぶつかつた。 だが、球磨川は無抵抗。 髪の毛に拘束されてしまった。

財宝は拘束された球磨川を見て呟いた。

「本当に弱いのかな？」

財宝ははつたりか何かだと思っていた為、少し驚き、つい口から言葉が出た。 それを見た球磨川は珍しいと思いながらいつものようになんへラへラと笑いながら気味悪く声を発する。

「『だから言つたじゃないか』『僕は一番弱いってさ』『完全に弱者なんですね』『僕は弱さを自覚しているんだ』『キミみたいに異常じゃないんだよラツキーくん』」

球磨川が言い切つたと同時に銃弾が飛んでくる。 財宝への攻撃は全て除かれる。 だが、球磨川への攻撃は全て直撃した。

「流石先輩！ 銃で撃たれても死がないなんて漫画チックで凄いですね。 僕なんて銃弾くらつただけで即死しちゃいそうですよー」

髪の拘束から解かれて銃弾を浴びた球磨川は床に倒れた。
それを見た財宝がそう述べたのだ。 誰がどう見たって死んでる
と言い切れる光景でだ。

「自称弱者は床が大好きなのかい？ 弱者なら最後までグダグダ
しましようぜ？ もしかしたら勝てるかも知れないじゃないか？
何なら俺が仲間になろうか？ 暇だし」

財宝はニヤニヤとぶれない笑みで球磨川に言った。

「『誰がキミを仲間にするんだい？ 一人ぼっちくん』『そん
なにマイナスぶつてもキミは唯のプラスだ』『口調だつて作り物だ
から安定してないし』『性格も偽つてさ』『醜いもんだよ』」

球磨川は立ち上がった。 そして何故か球磨川は

『無傷だつた』

財宝以外の人間は驚く、同時に意識がとんだ。 球磨川が
何処からか出したネジで壁に拘束兼攻撃したのだ。 わずか数秒
の出来事である。

一人だけ狸寝入りしていたのに財宝と球磨川は気付いたのか気
付いてないのかは別の話。

7 (前書き)

会話文が長いです。

「なんだ……これは……」

めだか達が見たものは、チーム負け犬と裏の六人達が床や壁に螺子で打ち付けられている光景だった。

驚きを隠せないめだか達。すると、奥から何やら話し声が聞こえてきた。嫌な予感しかしなかった。悪の塊と表現できない塊の姿が見えてしまったのだから……

「『あーやだやだ』、『キミと話していると氣分が悪くなるよ』『マイナスより性質が悪いね』『マイナスぶつてるプラスなんてどう付かずもいいところだよ』『幸せな奴が過負荷ぶっちゃつてもうー』『幸せだからできる行動だよね』『そんな事するからや』『嫌われるんだよ?』」

「人間で一番言われたくない奴に言われたらおしまいだなー。何処に向かってるんだろう俺。後で、『嫌われるんだよ?』って言つたけどさ、『わざと嫌われるようにしてる』とだけ言つておこうか。ほらほら、伏線だぜ? 回収準備はいいのかい? もっと貼ろうか?『マイナスには幼馴染がいるかもしない』『×××に久しぶりに会いたいな』とかね。……前者は回収してほしくないな。逃げよう、何処か遠い場所へ」

財宝はいつものよつよつヤーヤーと笑わず、無機質に近い表情での場を去りうとする。

「『幼馴染?』『そんなキミの作ったキャラを崩すほどの人物がい

たかな?』『…………』『今とは違つ性格のキミが優しくした女の子の性格が途轍もなく恐ろしいものでトラウマになるレベルだったとかじゃないよね?』「

「…………」

財宝は逃げ出した。 いつものように余裕あつての逃走ではなく、余裕なしの全力ダッシュだったことから図星だったことに間違いないだろう。

×

あれから何日か経つた。 財宝は公園のベンチで横になつて考え事をしていた。 勿論、ニヤニヤとした表情だ……と言つのは嘘で、表情は冷たいものだつた。 冷たい表情なのだが、いつものニヤニヤとした笑みの時より少し明るかつた。

「……やべえな」

財宝は呟いた。 顔は冷たく無機質とも表現できそうなほどの無表情だつたのだが、汗という汗が体中から吹き出していた。 それに気づいたのか、顔に手を当てる。 手を退かすといつものようにニヤニヤと気持ち悪く、マイナスにしか表現できない笑みがあつた。だが、汗は止まらず、ダラダラと流れている。

「……下手すれば有明ちゃんも殺されかねない」

財宝はその原因となる人物を思い浮かべる。 可能性しかなかつた。 アイツなら殺してしまいそつ。 財宝はため息を吐き、頭に手を置いた。

「……やつぱり、こゝは行くしかないか」

もう少し遊んでいたかったが仕方が無い。悪にも正義にも付かなかつた第三者の自分はいつでも抜けられる。抜けるなら今しかないと財宝は握り拳を作り、考えをまとめた。

「逃げ」「……財宝くん?」「あつ……」

財宝の計画が音を立てて崩れ落ちていつた。めだか達が見たら驚いただろつ。あの財宝の引き攣つた顔がそこにはあつたのだ。

×

「財宝くんだよね？ 財宝くんだよね？ 五歳になつたと同時に行方不明になつた財宝くんだよね？ まさかこんな夕方の公園で会えるなんて夢にも思わなかつたわ！ 奇跡……いや、これは運命と言つ赤い糸が全てを結んでくれたに違ひないわ！ 絶対そうよ！ 何てつたつて世界は恋する乙女に優しいんだもん。これくらいやつてくれなくちゃ駄目よ絶対。その期待に答えないとな！ それで財宝くん……知り合いに女の子はいる？ 勿論いないよね？ ああ、めだかちゃんは別よ。だってあの子は恋愛じゃなくて動物を愛するようにしか見えないもの。だから女子（めだかちゃんを除く）ね。それならいいでしよう？ つてあれ？ 財宝くん、そんな顔出来るようになつたの？ いつも無愛想で無口でクスリともしなかつたのに…… その表情もいいわね！ クールとはまた違つた良さがあつて！ つてあれ？ どうして無表情になるの？ それに凄い汗。何か怖いものにでも遭遇してしまつたかのよう……心配しないで！ 財宝くんの敵は私の敵でもあるの！ ちゃんと口に出して言つてよ？ それなくても表情が顔に出ないのは自分で

もわかつてゐるでしょ？　いやいや！　悪口とかじゃなくていい意味でよつ！　私が財宝くんの悪口なんか言つわけないぢやない。そんなの明日世界が腐り果てるぐらうありえないわ！　それぐらう私は財宝くんを必要としているの。　その理由を言つと長くなるからまた今度にするとして、財宝くん。　それつて箱庭学園の制服よね？　絶対そうよね？　今から私が入学する予定の箱庭学園よね？　立て続けにこんなことが起ころるなんて！　嗚呼、神様は赤い糸で編んだ絨毯を敷いてくれてるようだわ。　財宝くんと私を応援してるのね。　それでね財宝くん。　もう一回訊くけど知り合いに女の子つている？　勿論、私を除いて。　いないよね？　勿論いないよね？　いるわけないよね？　その顔から判断しにくいのだけれど……　いないよね？　まあ、昔から財宝くんに近づく女子は何故か次の日から学校に来なくなるのだから誰も近づかないよね。　よかつたよかつた。　だけど、それは五歳の時の話。　十数年経つた今ではその性格の変わりようといい、何か如何わしいことの一つや二つはあつたんじやない？　と私は考えたりするのよね。　怪しいわ。怪しい怪しい。　財宝くんを疑いたくは無いのだけれど、こればかりは仕方の無い事よね。　夫が浮氣してるとか妻は気になるものなのよ。　だからそういうことはすぐに言つた方が身のためよ？心当たりはある？　無いって断言してくれたら嬉しいわ。　でもあつて言つたら……　狂つてつい、殺してしまうかも……　それほど愛つてものは深く、傷つき易いの。　でもね、私は財宝くんはそんな事しないって信じてるから！　だつて、財宝くんは私にメロメロだもの。　そんな財宝くんが雑草如きに話掛けるわけないもん。世界の常識の一つよ。

一つ田は女は財宝くんに近づかないつて約束。　どちらも当たり前中の当たり前。　破ると言つ考えすらもつてはいけないの。　わかつた？　つてわかつてるか？　この話、最後に会つた時にも言つたものね。　忘れてるわけ無いよね。こで忘れたなんて言つたら骨という骨が碎け散るしかないものね。こないない。　あはは。　それでね、財宝くん。　その手に持つて

るお菓子は何？　ああ、誰に貰つたじゃなくて甘い物食べれるようになったの？　つて意味よ。　甘い物なんて見るだけで気分が悪くなるとまで豪語してたのに今では好物になるまで食べれるようになつたのね。　偉いわ。　努力したのね。　これでバレンタインデーのチョコレートを甘口に出来るわね。　ああ、後で今までに作つたチョコレートを持つてくるから全部食べてね？　毎日、一個ずつ作つたの。　でも、甘くないようになっちゃつたなー。　そうだ！　今まで作ったチョコレートを全部混ぜて砂糖を塗せばいいのよ！　そうすれば甘くなるし、我ながらナイスアイデアね！　じゃあ、私の家まで……　えーと……財宝くんって一人暮らし？　なら同居しない？　私がそっちに行くからさ！　いいよね？　それぐらい。　今まで会えなかつた分の寂しさも有つたし、ずっと一緒にいたいからね。　一つ返事で了承してくれるのが財宝くんのいいところよね。私は昔からこの手のせいで家事は出来ないけど……　『財宝くんに触ることは出来るんだし！』　財宝くんのその異常なお蔭で私は財宝くんにだけ触れられる。　これは仕様つてやつよね？　財宝くんの好きなゲームで言う設定つてやつよね？　嬉しいものね。

設定。　私が財宝くんに会つたのも設定だし、恋をしたのも設定。離れ離れになつたのも設定で、再開出来たのも設定なのよね。ああ、それでこのタイミングに会えたのね。　ちょうど今から過負荷の教室作りの為に一人で敵陣に向かう途中でなんて、設定以外ありえないわ。　これを乗り越えて幸せになれて設定なのね。初めての共同作業……　幸せになる序章つてわけね！　だからね、財宝くん。　一緒に行こう？　今からめだかさん率いる幸せ者にちょつかい掛けにいくの。　財宝くん、あなたの能力なら全員瞬殺出来るでしょう？　私知ってるのよ。　その能力は自分を幸運にするだけじゃなくて運の相場を変える事が出来るんでしょう？　つまり、自分の幸運をあげると同時に他人の幸運を引き下げる事が出来る。それが『福作用』よね？　全部球磨川さんに聞いたわ。　だからお願い。　一緒に来て。　あなたは敵陣に入つてと同時に他人の運

をマイナスにすればいいの。簡単よね？ そうすれば皆幸せになる世界が訪れるの。誰も私達の邪魔なんかしない平和な世界が

ね。あのめだかさんに勝てるなんて無理だとか思ってるんでしょ

う？ はつきり言うと不可能に近いわ。

いや、不可能よ。

荷が異常に勝てるわけないじゃない。

過負荷ならね。

だつて財

宝くんは異常じやない。

なら勝てるわ。

めだかさんだって運に

は勝てないのよ。

現に、子供の時は攻撃できなかつたし、全て引

き分けになつたから大丈夫よ。

負けさえしなければ過負荷にとつ

てそれは勝利よ。

寧ろ、引き分け以外に勝利の方法なんて無いわ。

勝つてしまつたらそれはもう異常だもの。

勝利しないがゆえに

落ちこぼれなのよ。

だから一緒に戦つて幸せになりましょう。

全ては平和の為に、幸せの為に

「…………」

ほぼ息継ぎなしで言い切つた彼女の言葉に財宝は言葉を失つた。

財宝の冒険の書が消えかかっている。だが、財宝の冒険はまだ

まだ続くのだった。運を操れるのに運命には逆らえない勇者がそ

こにいた。

箱庭学園一年十三組一番、××× 財宝。一年十三組には他に生徒がいるのだが、登校しなくてよい為、必然的に財宝が一番となつた。但し、授業は行われず、黒板には大きく『永久自習!』と書いてあつた。そして、その唯一の登校者である財宝は箱庭学園の生徒なら誰しもが知つてゐる有名人だ。生徒会長の様な目立ち方ではなく、悪い意味でだ。別に思い切つた悪い事をしたわけでもなければ良い事をしたわけでもない。唯、関わつた者の殆どが一度と会いたくないと言い切つた。それほど氣味が悪く、近寄りがたい人物だという事がわかる。

そんな危険人物である財宝は今……

「……どうしてこう、俺は運が悪いのだろうか……」

自分の運の悪さを憎んでいた。いや、正確には運ではなく、運命というものを憎んでいた。財宝の能力でそこんところ調整できるのではないか? という疑問が湧くだろう。実際、可能である。だが、財宝はそうしない。便利であり、使いがつてが良すぎる為、人生に深く干渉するような事には使わないのだ。本人曰く、『正義の味方なら正義の為に使用する。悪の根源なら己の理想の為に使用するだろう。だけど、俺はどちらでもない。だから人生に深く関わるようには使わないのだ』と、ニヤニヤと笑わず、少しだけ微笑みながらそう言つていた。

財宝が実は優しい性格の人なのかという考察はまた別の話。

そして財宝の状況を説明しよう。今、財宝は軍艦塔ゴーストバベルと呼ばれる

旧校舎に向かっていた。 財宝が最も苦手とする人物と一緒に……

その人物は財宝のことによく知りすぎていて、触れたものが腐ってしまうというびっくり人間だった。 但し、腐らせるに財宝は含まれない。 財宝の知的好奇心による実験により、そのような結果が出たのだ。 改めて財宝の能力は異常でも特別なものなのだと実感できるだらう。

「じゃあ、私が戦つから財宝くんはサポートしてね 」

財宝の苦手とする人物、『江迎怒江』はマイナスと言えるような異質なオーラを出しながら、包丁の刃を迷うことなく握り、失礼しますと、言いながらドアを開けた。

「すみません。 此処をマイナス十三組の教室にしたいんですねー、この軍艦塔ゴーストバベルを問答無用で速やかに明け渡してもらいますうー？」

「マイナス十三組ねえ……それよりさ、どうしてキミが一緒にいるのかな？ 財宝くん」

『黒神真黒』はマイナスがやつてきた事よりもどうしてマイナスに付いているのかの方が気になつた。

「…………おおつとー！」

財宝は自分が無表情だった事に気づき、顔を手で覆つ。 数秒経ち、手を取ると真黒達の知つていいに一つの「ニヤニヤ顔に戻つた。 真黒達は財宝の行動の意味がイマイチわからず、不思議そうに首をかしげた。

「……今のはなんだい？ 何か意味があつたかには見えないんだけど…… キミは何故か解析できないから困るよ」

「解析出来ないじゃなくて解析させないだよ。俺の異常性は使い勝手いいもんだからそんなことさえ出来てしまつたさ」

その場にいた怒江以外の人物、真黒、いたみ、くじらは財宝の異常性を幸運なだけと勘違いしている。幸運とは人によって価値觀が違ひ、日時、気分などによって幸せと言うものは変化するのだ。

それを自由自在に操れるのが財宝の能力である。メモリーカードにゲームのデータをいくつも保存するように設定でき、上書きして保存する事も可能なこの能力は、もはや異常の域を凌駕している。

例えるなら、めだかや球磨川がゲームのキャラクターだとした場合、財宝はそれを操作するプレイヤー。つまり文字通り次元が違うのだ。強い弱いでも勝ち負けでもなく、もとからそんな勝負すらないのだ。だが、財宝は自分の設定を低めて楽しんでいる。

通常のノーマルモードではなく、ハードモード。ゲーム好きの財宝にとつて自分の完成された能力はあまり好ましい物ではなかつた。

なぜなら元からレベルがカンストしている主人公を操つて何が楽しいのだと、ゲーム理論で嫌つていた。苦戦して戦うからこそ勇者の楽しみつてものがある。そんな考えの持ち主だった。

そんな財宝もいつしか王道を毛嫌いするようになつた。明らかに物語の主人公にしか見えない人物を見つけてしまつたからである。なら、自分はどの立場になるのだろう、と財宝は考え、思いついたのが……

負けイベントである。

負けイベントとは通常、勝たなくては進まないイベントなのだが、明らかに自分の身の丈にあつたレベルではない敵と戦い、仕方なく負けてしまうといったイベントなのだ。その負けイベントの敵になつてやろうと考えたのだ。あくまでストーリーとは関係ない、お遊びの戦闘。敵か味方がさえもわからぬいどつちもないキャラクターだ。

そしてその考えを貫いた結果、彼は嫌われ者となるのだが、それはまたいつか話せる時が来るだろう。

話を戻そう。現在、怒江、財宝の一人がマイナス十三組の教室確保の為、奮闘しているところだ。

「そんな事どうでもいいですよー、早く此処を引き渡してくれませんかあー？」

「そうだよ。早く渡しちゃいなよ。面倒だしさ。それと、キミのコレクションは燃える『キミでいい？』

「ヤーヤと笑いながら財宝は真黒の妹達のグッズがあるであらう部屋の方角を指差した。

「……一対一か……キツイな」

「ん？俺は戦わないよ？ だつて付添い人だし」

財宝はさう言つとその場で横になつて戦わない事を態度で示した。

「そうか……仕方ない……管理人として戦うしかないな！」

真黒は駆け出したと見せかけ、自分の履いていた靴を飛ばした。

「小賢しい！」
（じやか）

怒江は持っていた包丁を器用に投げた。包丁は靴に刺さった。すると、後ろから気配がするではないか。怒江は驚く。

「後ろですか？！」

気配に一早く気づいた怒江はすぐさま振り向いた。

「その通り、後ろだよ」

その声は振り向いた怒江のすぐ後ろから聞こえた。何故か真黒はパンツ一枚という誰かが騒ぎそうな姿だった。つまり、真黒は靴を飛ばし、その靴に目がいっている間に脱いだ服を怒江の背後に投げたのだ。その行動は正に、魔法使いと言えるだろう。

そして、真黒は人に触れる程度のチョップを当てようとしたのが……

「なつ……ー？」

その攻撃とすら呼べない攻撃は、意を反して右斜め下に大きくずれた。

「ああ、言つてなかつたね。俺は戦わぬって言つてたけど。協力はしてるんだぜ？ サポートするのは俺にとつては戦うじやないんでね」

財宝はあくまで、自分がメインとして戦わないという意味で言ったのだ。別に能力を使わないとは言つていなかつた。

「それこそ、俺がいなぐても江迎ちやんだけで十分戦えるんだナビね」

真黒はその言葉を聞き、怒江の方を見た。

怒江の掴んだ真黒の着ていたシャツは腐り果てていた。

真黒は自分がどんな状況に置かれているのかを考え、ため息を吐いた。

9 (前書き)

急展開注意

「（どうすればいい……）」

黒神真黒は悩んでいた。今の状況を開拓する策が浮かばないのだ。

改めて自分の置かれている状況を整理してみた。現在、自分の妹とその親友が自分の背後に、入り口付近には球磨川の計画の為、呼ばれたであろう少女と、この学園内で一番関わりたくない非力な少年が一人だ。これだけだと勝てそうな気もするが、ステータスの差が段違いだった。

自分と妹は戦闘には向いていないし、唯一、戦闘に向いている妹の親友も今は治療中の為、戦う事はできない。それに引き替え、相手は自分の脱ぎ捨てたシャツを腐らせる少女、触れる事すら出来ないままに解析不能な少年。しかも相手はプラスとマイナスという異色なコンビ。勝てるわけない。

通常、マイナスとプラスが組むことはありえない。性格上の問題で組むことすらできないのだが、財宝の性格によってその問題点が解決されたのだ。昔に関わっていたおかげだろう。

プラスとは勝ち続けるもの。マイナスとは負け続けるもの。それが一緒になつたらどうなるかなど分かりきったことだ。勝利も敗北も知り尽くした二人にどう対応できるんだと真黒はイライラしていた。

神にでも祈るしかないのかと諦めかけた時、ドアが開いた。

「お兄様、お姉様、何やら騒がしいのですが。セクシャルハラスメントの真っ最中ですか？」

真黒の妹、めだかだつた。真黒はナイスタイミングで来た妹を見て、大きくガツツポーズをした。

「…………勇者か…………黙田だ。逃げよう江迎ちゃん」

財宝は相変わらずの主人公っぷりに苦笑いし、江迎に逃げようと呼びかけた。

「どうして？ 財宝くんだつたらこんな奴ら簡単に」「無理だよ。俺が例えめだかちゃんに勝てたとしても次には負けるだろう。主人公だからね。そういう事は学ラン先輩の方が向いてると思うよ。空しく勝たせるのだから、俺より向いてるよ。だから逃げよう。経験値なんていらないよね？」

財宝がそう問いかけると怒江は黙つてこくりと頷き、床に手を当てた。

「戦略的撤退つてやつだ。また遊びに来るかもね。今度はそっちの味方になるかもしれないしね。じゃあ、また今度」

財宝がニヤニヤと笑い出したと思つたら消えた。のではなく、江迎が地面を腐らせ、逃げたのだ。めだか達は予想外の人物の登場に驚きを隠せないようだつた。

「久しぶりだね、財宝君。いや、×××の方がいいかな？」

「……苗字はやめてほしいな、もつ聞きたくないし」

「わかつたよ財宝君、だからニヤニヤと笑おつぜ？ キミの作ったキラは最後まで通さないとね」

あははと少女は笑った。少女とは言えないかもしない。本いわく、五百年は生きているとのこと。なので少女とは言い難いが、財宝が明らかに女性には言つてはいけない一言を言つてしまい、少し消されかけたのはつい最近の事。

「それより僕に用つて何だい？ キミなら大抵解決出来そうだけど」「今日はそれも叶いそつにないんだ。だからキミを頼つたってわけ

財宝は少女に全て説明した。少女はそれを聴き、ニヤリと口元を歪めた。全て、自分の思い通りに動いていくとばかりに……

×

それからしばらくの間、財宝が学校に来ることは無かった。最初はめだか達も心配していたのだが、マイナス側だと思つためだか達は何か作戦でも練つてるのだろうと気にしなくなつた。

生徒会がリコールされ、戦拳も一戦終わり、一対一となつた。
そして二戦目……

「では、サブプレーヤーをお選びください」

今回の戦挙の審判を務めている長者原融通がそう言つた。 今回のゲームは火付兔。 通常、一対一の戦いなのだが、今回は異例のタッグマッチ。 戦い終えた者も含め、誰かをサブプレイヤーとしてのバトルだ。

「まあ、俺 「……俺にやらせてくれないかい？」

善吉の言葉を遮つた者は財宝だった。

「 「 「 財宝！？」」「

「……別に俺だっていいだろ？？」

「本当に財宝なのか？ なんだか子供の頃にそつくりなのが……」

その時の財宝からは今までの気持ち悪さも、近寄り難さも、何も無く。 唯、普通の少年だつた。 さらに当の本人は憑き物が落ちたかのように性格が変わつていた。 今までのニヤニヤと人の気分を害すような笑顔を浮かべず、異質な言葉の羅列だった言葉も口数少なく、昔の彼を知らないと多重人格なのかと疑うレベルだった。

「お前！ 球磨川側に付いてたんじゃ 「……違うよ。 あくまで幼馴染のお手伝いしてただけだよ」

またも善吉の言葉を遮つて財宝は答えた。 いつもの財宝なら気持ち悪くてイライラするのだが、今の財宝は物静かでクールだつた為、何か怒りにくいものがあつた。

「久しぶりね財宝君、その制服似合つてるわよ

善吉の母、人吉瞳ひとよみが財宝の制服を指さし言った。

「あつ！ お前なんでその制服を！」

財宝が着ていたのは生徒会が用意した特別性の赤い制服だった。

「……だつて瞳先生に作つてもうよう言つておいたからね」

皆は瞳の方に目を向けた。

「あはは～、秘密兵器的ポジションだし、言わなくていいかな～って思つて」

瞳の反応に苦笑いのめだか達一向。それに財宝が一言。

「……それに赤いから三倍の何とかかもしれないし」

気持ち悪い財宝の第一人称がゲーム脳に変わった瞬間だった。

×

「どうして財宝君……そつち側にーーー！」

江迎が信じられないようなものを見るかのように驚きながら、財宝に向けて叫んだ。

「……だつてさ、俺は幸プラスせだもん。不幸マイナスせには付けないよ

財宝は悟つた顔で答えた。それは本当に幸せそうな顔で、今ま

での悪戯ものの財宝が成長したかのよつだつた。

「では始めましょ。 会計戦『火付鬼』 スタート」「『待つて』」

球磨川は融通の言葉を遮つた。

「『ちよつといいシーンだつたから言いにくかつたんだけど』『キミの能力だつたらバトルも何もできないよね?』」

球磨川は財宝の能力のせいで今回のバトルそのものができなくなつてしまふのではないか、と言いたいのだ。 財宝の能力は戦闘というものを末端微塵にしてしまい、勝ちも負けも引き分けもすべて無かつた事にしてしまうからだ。

「……その点は問題ないよ球磨川くん。 だつてね」

財宝はポケットから、あらかじめ用意してあつたのであろうナイフを取り出し、自分の手の甲を薄く切つた。 切られたところからは少しづつ血が流れしていく。

「……あんな能力捨てたから」

財宝はニヤリと口元を歪めた。

10 (前書き)

念願の十話です。

植物園西口

「財宝君、異常性を捨てたって……本当なの？」

「……まあ、捨てましたね。ポイッと」

少年はニヤニヤと笑わず、何を考えてるかわからない、無に近い表情で言った。

「　捨てたってビリやつて？」

追及していくる瞳、そりゃそうだろ。異常性を捨てるなど通常、ありえないのだから。まだ、くじらの作った『ノーマライズ・リキッド』でさえ、まだ未完成なのだ。何処でビリやつたかを聞き出したくもなる。

「……企業秘密ついでやつです。教えちゃいけない約束ですの」

財宝は瞳から目線を反らし、自分に付けられたブレスレットを見つめた。そしてニヤリと口元を歪め、自分の憶測を言った。

「……瞳先生、球磨川は絶対に俺を殺しに来るでしょうね」

「その厄介な異常も無くなつた今がチャンスとばかりにね。分けのルールを聞いた時、目が途轍もなく輝いてたし」「引き

瞳の話を聞いた財宝は口元だけ笑っていた。

「……瞳先生、俺が異常じやなくなつたと聞いてノーマルだと思いましたか？」

「えつ？ そうじやな ！？」

瞳が驚いたと同時に植物園の植物が急成長し始めた。急成長といふ表現をも超える速度だった。その植物の茎が瞳に絡みついた。

「……面倒だな」

財宝は次々と襲つてくる茎から素早くかわした。と思つたら減速し始め植物の前に立ち止まり、茎を掴み、引きちぎつた。

「ざつ……財宝君？ そんな超人設定だつたっけ？」

植物の拘束から解かれた瞳は驚きながら財宝を指さす。一応、財宝は運を操れるものの、その他の才能は皆無といつ『設定』だった。

「……そんな設定捨ててきましたよ。これが俺の新しい異常……いや、異常じやないや、過負荷、『業突グリードく張りの導き』です」

少年、いや、男は無表情かつ無機質的にそつそつのだつた。

×

「業突グリードく張りの導き？」

情報が交差し、上手く理解出来ない瞳に財宝が説明した。

「……俺のステータスをあべこべにする能力です。俺の行動パターンによってステータスが決まります。だから、あの時、速かつたり、強かつたりバラバラだつたでしょう?」

「ああ……」

言われてみればその通り、いきなり速くなつたと思えば遅くなり、いきなり強くなつたかと思えばその後、手を痛そうに抑えていた。

「……そのステータスの変化の条件が酷いものでしてね。例えば、俺が一步前に進めばステータスが変わりますし、俺があ行の文字を話しても変化します。そんな面倒な条件が一十九万八千六百二十三通りありますね」

面倒な設定ですね、と他人事のように続けて言った。

×

別の部屋にて

「なんじゃそりゃ！？」

善吉がありきたりな反応で驚いていた。

「そんなのマイナスつて言えるのかよ！」

善吉の考えはおそらく、変動パターンを極めれば自由自在に操れる戦闘型のプラス。決してマイナスとは程遠いものじやないのか

などと言つた者も多かった。

「いやいや、酷いマイナスだと思ひやつて。俺は」

そう言つたのはくじらだった。

「いや、でも師匠。こんな使い勝手のいいマイナスつて
「ビニに使い勝手のいいところがあるんだよ」

轟古の言葉を遮り、くじらは語る。

「俺が見た限りでは呼吸だけでも九十八パターン変動してるぜ?
それに入れを数週間でコントロールつてどんだけ異常なんだよ」

くじらの言つた呼吸パターンの変動とは、財宝の速度が上がる前、
呼吸の仕方が違うかった所があったのだ。通常の呼吸とは違い、
大きく息を吸つたと思えば、呼吸を止め、息を吐かずにさらに息を
吸つていた。

そんな些細な所まで見逃さない辺りが研究者くじらの凄い所だろ
う。

「一つに留まれない……か、酷い欠点だな^{マイナス}」

めだかは語つたような目でモニターの財宝を見た。

「だが、ひとつして奴は気持ち悪さとつものが無いのだからつか

疑問は募るばかりだった。

×

「……兎に角、球磨川君を倒しましょ。」一面に出てきたクッパ
は弱い筈ですから

「そのゲーム理論は気に入らないけど、まあ、それしかないよね」

「……じゃあ、俺が一人で探してきますよ」

財宝は右手に握り拳を作り、一回深呼吸をした。瞳が見たのはそこまでだった。いつの間にか財宝は消えたいたのだ。ありのまま今起こった事なんかそれだけだった。

「さつきとは比べものにならないくらいに速いわね……ってあれ？ 財宝君のマイナスつて『自分のステータス』を入れ替えるのであって、パワーアップはしてないって事だよね。つまり、どれか規格外なステータスがあるの？」

「うーん、と瞳が悩んでいると後ろから気持ち悪い気配がした。

「『これはこれは瞳先生』『二人つきりだなんて運命ですね』」

改めて瞳は財宝の運が無い事を感じ取れた。

×

「ああ、どうして財宝くんは財宝くんなの？」

「……運が悪かったからだよ」

財宝は自分の運の悪さに嫌気がさしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687y/>

ラッキーな少年の物語

2011年12月21日17時47分発行